のけ者から学ぶ
病気をビジネスにした”のけ者たち”

浦河赤十字病院 / べてるの家
向谷地生良（むかいやち いくよし）

みなさんこんにちは、浦河町から来ました向谷地です。私は浦河赤十字病院のソーシャルワーカーという仕事をしており、この春でちょうど24年目になります。病院ですから様々な病気や障害を持った方が利用されるわけですけれども、そうした方たちが病気や障害を抱えながら、地域の中で生活していくことを形づくるための相談支援をするのが私のソーシャルワーカーとしての仕事です。その中でも特に、精神分裂病などを抱える人たちと一緒に活動してきました。そのことと今日の町づくりとを関連づけてお話したいと思います。

先ほどの下村さんのお話をお聞きしまして、痴呆の方々、高齢者の方々に起きていることと、いわゆる精神分裂病の人たちが体験したことと同じだなと思いました。精神分裂病という病気が最初に発見された時にどういう病名がついたかというと、「早発性痴呆」という病名がつけられました。ちょうど思春期から働き盛りにかけて、何かつじつまが合わないことを言い出したり、いわゆる呆けたようになってしまうことから、始めは痴呆の問題としてこの名前がつけられたのです。当時、早発性痴呆の人たちはどういう扱いを受けていたかというと、足に鎖を繋がれて、そしてまるで囚人の様に鉄の重りをつけられ、もしくはベッドに縛りつけられていました。数年前たまたま本屋で、中国人の写真家が出版した、中国の精神障害者の生活実態を写した写真集を見かけました。中国は広いですから様々なレベルがあるのでしょうけれど、障害者がどういう生活をしているかというと、木に両手両足を縛られて1日中そこで過ごす。それから、自宅の前に石を積み上げ牢屋のようなものをつくって、そこで自分の家族が世話をする。写真ではそこから子供さんが手を出して食事をねだっている場面ですとか、朽ち果てた木の下にわらを敷いて鎖でつないだ家畜同様の姿が写っていました。かつてはこういうふうにしていわゆる早発性痴呆の人たちは暮らしていたのです。明治時代では自分の家にそういう牢屋を持つことが法律で認められていて、それぞれの家で管理し、そしてそれを警察官が時々見回るということがありました。そういうことを考えたとき、私たちは、痴呆を巡る1つの文化について問われているのではないかと思うわけです。

私が勤める浦河日赤病院は、ごく普通の病院だと思っています。それでも札幌の学生時代に、難病患者や障害者の自立活動にボランティアとして関ってきた経験からいいますと、ここで行なわれている分裂病や精神障害の人たちに対するケアの方法というのは、囲い込んで管理してそして服従させるということで、医学の「い」が医療の「い」ではなく囲い込みの「囲」で、看護の「かん」が管理の「管」、福祉の「ふく」が服従の「服」だ

というように思いました。今は大きく時代も変わりまして、いろんな事件があるたびにそうしたことは改善されどんどん変化してはきましたが、基本的にはまだまだそういうイメージが抜けきれないということがあります。そこで私は分裂病を体験した人たち、若者たちに、精神分裂病をすると途端に仕事がなくなったり、暮らす場が見いだせなくなくなったりすることを自分のこととするのではなく、むしろこれは地域の課題だと、そしてそのような課題に直面した１人の町民としてみんなに知らしめていこう、これを町づくりの大事な１つの体験として地域に出て行こう、と呼びかけてきました。

今、およそ日本人の100人に1人が精神分裂病を患う時代です。このことはほとんど知られていないのですが、それだけポピュラーなことなのです。その原因の1つはストレスなのですが、それに人間の脳が耐えられなくなって、症状を起こします。ストレスというのは様々な親子の関係、子供同士、職場の人間関係といった人と人との関係の中で起こるもので、そうした関係の中、人とのつながりの危機の中に、精神障害の病気・症状が起きているのです。この病気を経験した人たちに、関係の危機を生き抜いた、とても大切な経験をもった町民の1人として地域に出て行こうと呼びかけました。そしてその呼びかけの1つの方法は商売でした。べてるの家では昆布の販売をしておりますが、そこの販売部長で代表の早坂潔さんという方は、中学のときから幻覚妄想状態で入退院を繰り返していて、そしてまた中程度の知的障害ということで、それがまた彼の劣等感になっていました。どこへ行っても発作をおこして仕事は長続きしない、そんな彼と出会ったとき一緒に、昆布の袋詰の下請けを将来に向けた第一歩として始めました。そして今から12年前親元の会社が倒産してしまい、それがきっかけで、それじゃあ自分たちで浦河の漁港と交渉して、昆布を仕入れて全国に産直を始めようということになったのです。そんななかで、メンバーの1人に生活のために細々と貯めていた10万円を借りて、日高昆布を仕入れました。昆布を仕入れるときには、早坂さん自身が「日高昆布をこういうふうにして売りたいのだ」と交渉し、漁港の方も「日高昆布を全国に売ってくれるのはいいことだね」と全面的に協力してくれるようになりました。管理や保護や人の決めたレールに乗って生きることを余儀なくされていた人たちが、今ではこうした形で少しずつ、一町民としてどうやったら地域に貢献できるか、地域に参加できるかということを掲げて事業に励んできています。12年前に10万円の元手で昆布を仕入れていたのが、それが今1億円の売上を誇る事業体に育っています。早阪潔さん1人から始まった仕事ですが、今ではあちこちで解雇された知的障害者の方たちも含めて、100人の働く場となっています。その中には他ではなかなか受け入れられない薬物やアルコール依存の人たちも一緒にやっています。また、近所のおじちゃんやおばちゃんたちがその中に混じって、わいわいがやがやと事業に精を出すようになりました。

浦河の特徴は、精神分裂病を持った人たちが、積極的に自分の病名を地域の人たちに紹介して自分の症状をちゃんと伝えているということです。そういうことによって面白いことが起きてきました。「自分は子どものころからずっと人の目を気にして、親や家族が気に入ること、人に褒められることばっかり一生懸命いいと思ってやってきたけど、実は自分の思いというのはずっと揺らいできた。い

い成績取るために一生懸命勉強して、そして会社に入ったらまたいい成績取るために、ずっとがんばってがんばって。今まで何1つ自分のために生きてこなかった。自分を置き去りにして今まで生きてきた。そして病気のスイッチを入れてしまった。電池が切れちゃった。もう人の評価を受けるために生きるのはやめた。」そう言って語る当事者の人たちのメッセージを聞いたいわゆる健常者といわれる多くの人たちから、「それは自分も同じだ」と共感が寄せられるようになったのです。そして、この病気ということが単なる病名ということではなく、1人1人の生き方、それから地域、学校、職場などで抱える様々な課題である、と地域の人たちが気付いていくということが起きてきました。浦河の町では、もう第7回になるのですが幻覚妄想大会を開いて、多くの人たちに参加してもらって、私はこんな幻覚・妄想が見えました、ということを行なっています。あるメンバーによると、いつも自分の周りに約721人の幻聴さんがいて、そして講演先に行くと、「今日は2000人来ています。皆さんの肩越し、頭の上に幻聴さんがいますので、よろしくお願いします」と語るのです。従来そういうことはタブーだったわけですが、今では地域に受け入れられるのです。幻覚妄想大会でグランプリを取ると、翌日の日刊にはちゃんと載るし、町を歩けば町の人たちがグランプリおめでとうと言ってくれます。そんな文化が少しずつできてきたなかで、病気を経験した人たちが地域貢献というかたちで、一見健常者に見える人たちを支援していたのだということがわかってきました。昨年の暮れ、朝日新聞の一説で「べてるから吹いてくる風、一のけ者をつくらない文化」ということで、べてるのことを取り上げていただきました。のけ者をつくらぬ文化。従来精神分裂病にしてもそうですが様々な障害を持つ人たちは、健常者といわれる人たちから訓練や指導を受けて、

その結果として何か社会復帰した、一般社会に通用する人間になった、というように思われてきました。ですからそのための働きかけや指導というものを一生懸命やってきたわけです。

今不況の時代ですが、いろんな方たち、例えば商売を営んできた人が困っている状況で、浦河の町でも商店街、経営者の人が困って、自殺してしまうとか鬱が非常に多くなっています。本当にそれだけ生きるということ、暮らすことに様々な人たちが危機を感じているのです。そうしたなかで分裂病を経験した人たち、痴呆の人たちは、地域にとっての栄養剤・ビタミン剤なのだということを考えさせられています。べてるの人たちは自分たちの経験をビデオ化して、全10巻として全国販売しようと計画を立てています。これは「病気を元手に抜け目なく」というキャッチフレーズを掲げながら、病気を元手にしてビジネスをしていこうということです。自分の体験を語ったビデオが売れれば印税が入る。どんどん自分の病気を語ることによって、それが自分の収入、生活の糧になる。語ること。そうしたことを１つビジネス化していこうと思っています。精神分裂病や精神障害、そして痴呆を抱える方たちの周辺には必ず関係の危機が生じているわけです。その危機を非常に不快なもの、無意味なものとして考えれば、もしかしたらそういう人たちを排除し、どこか特別なところへお願いして管理して、そして残された人たちで、というようになっていくかもしれません。しかし、逆にそれが地域において危機を生むということになるでしょう。高度成長の中で努力した結果、収入が増えて生活が豊になるという文化を改めて見直しながら、もう1度私たちがどういう地域文化をつくっていくのかが問われているのだと思います。障害を持つ人たちから学ぶ、のけ者をつくらぬ文化。そういう意味で、精神分裂病の人たちから学ぶことは非常に多いと思います。どうもありがとうございました。

質問：向谷地さんに質問いたします。　西ヨーロッパでは社会的企業・社会的協同組合というかたちで障害を持った人の就労支援という事業体、今までの営利企業とは違う社会的な目的を持った事業体ということが認められてきています。私は協同組合を研究しておりますので特に感じるのですが、そういう意味で今までとは違う、利益のための商売ではなく社会的使命を持った商売だと思います。こういう経営のご苦労ですとか、発展方法についての何か行政への要望がありましたらお聞きしたいと思います。

向谷地：べてるは有限会社を持っています。そして小規模通所作業所、グループホームが地域に70程あります。小規模作業所は昆布や海産物の販売をはじめ、ビデオ制作や出版なども始めていますし、有限会社では分裂病を経験した当事者の人たちが社長になりまして、介護保険の車椅子などのレンタル、住宅介助、病院の敷地管理などの介護事業を行なっております。有限会社では精神障害の当事者の人たちが働いているわけですが、だからといって社会的なサポートですとか年金面での特別な割引があるわけではありません。分裂病などの病気の人たちは、疲れやすく気分のむらがあるとか、それから何よりも自己

管理が非常に難しいのです。薬の飲み方を間違うと、ちょっと気分だとか体に影響してくるということがあります。それからいつも耳から悪口が聞こえるという症状や何かが見えるという症状もあります。こういう症状との付き合い方は、自分との付き合い方が基本になります。自分の中にストレスを貯めないで人といい関係をつくって、自分といい関係をつくっていくことが必要です。１人１人がだんだんそういうことがわかってきて、そして病気といい関係を持って社会に参加していけるようになるために、5年6年10年とどうしても長い時間がかかってしまいます。子供時代に受けた虐待などによる心の傷が癒えないと、なかなか社会に出ることができないという人もいますから、ものすごく時間が必要なわけで、そのために支援をしていかないといけないと思います。そうした人たちが企業を営んでいくとどういうことが起きるのかというと、その日朝にならないと誰が出勤してくるのかわからないという現象が起きてしまいます。それでも良いのですが、社会的な貢献、事業活動を行なっていくためにはどういうシステムが必要なのか、ということを考えていかなければなりません。分裂病の人たちが一般企業で働く場合、企業の方たちの応援や理解も必要ですが、ほとんどが当事者のがんばりによって何とか勤めることができるのです。一般企業はそういう人たちをサポートしながら、自分の会社経営をやっていきたいという所がほとんどです。べてるは自分たちが企業化することによって、地域の狭間の仕事を引き受けています。例えば、今まで本の配達をしていた本屋さんが、売上が良くないので配達を止めてしまいます。そうするとなおさら本が売れなくなってしまいます。そのことを聞きつけて、「べてるに配達をやらせてください、集金もやります、その代わり１割の利益をべてるにお願いします。」ということで本の配達の仕事をしています。それから日赤病院の職員を対象に、トラベルサービスとしてホテルや旅館の手配を行なっており、地域にも広がってきています。「安心してさぼれる会社づくり」というのがべてるのテーマの１つなのですが、安心してさぼれるにはどういうシステム、理念を持っていけばいいのかということを、今研究しながらやっています。そうしたなかで、この社会的企業というのはおそらく認知されていくでしょう。そして社会的企業の社会的貢献、つまり障害を持った人たちが参加する場として企業が発展するということは、きっと一般の企業や地域、いろんな場所に役立つものであると思っています。そういう意味で、社会的企業、協同組合というのは、非常に参考となるところがたくさんあると思いました。分裂病、精神障害になった人たちは、かつてはいろいろな場所で普通に働いていて、様々な技術を持っている人たちです。こうした人たちは、途中で病気になって長い間病院暮らしをしているという場合が多いのです。そういう人たちに対して、「どんどん社会に出て行っていいのだよ、そのために様々なノウハウを提供します、是非そのための施設としてどんどんべてるを利用してください、べてるを通して何かやりたいことをぜひ見つけませんか」というイメージで取り組んでいます。そして地域の中でも様々な交流を通して、浦河の人たちに参加してもらって事業を展開しています。